The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多様化する子ども達を教える補習授業校教師の 支えとするストーリーの構築と変容
Author(s)	瀬尾, 悠希子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69700
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　瀬尾　悠希子　）	
論文題名	多様化する子ども達を教える補習授業校教師の 支えとするストーリーの構築と変容

論文内容の要旨

本研究は、補習授業校（以下、補習校）の教師達がどのようにして多様化する子ども達の実情に即した教育ができるようになったかを明らかにしようとするものであり、「はじめに」と「おわりに」を含め、10章から成っている。

「はじめに」では、調査者である筆者の補習校をめぐるストーリーを示し、本研究を行う動機と本研究のスタンスに影響を及ぼした個人的経験を述べている。このストーリーは、後に第3章「方法論」で言及されるリフレクシヴィティの一環でもある。

第1章「研究の背景」では、グローバル化の進展に伴い喫緊の課題となっている、マルチリンガル、マルチカルチュラルな子ども達の教育において、継承語学校が重要な役割を担っていることを述べている。そして、先行研究に言及しながら、継承語学校の意義と課題を挙げている。続いて、補習校では子ども達の背景の多様化が進み、帰国の準備のための教育から、マルチリンガル、マルチカルチュラルな子ども達に対応した教育への転換を迫られていることを説明している。しかしながら、子ども達の実情に即した教育方針や教育内容への転換がなかなか進んでいないこと、また、補習校の教師に対する支援が少なく、教師達が自力で転換を進めていかざるを得ない状況があることを指摘している。そして、これまで補習校の教師に焦点を当てた調査研究が十分に行われてきていないことから、まずは教師の状況を理解することが必要であることを述べ、本研究の課題を、多様化する子ども達に対応した教育を行っている教師がどのようにして、多様化する子ども達に沿った教育を行おうという考えや、そのための授業実践に必要なスキルなどを身につけてきたのかを探ることとした。

第2章「理論的枠組み」では、本研究の課題に取り組むための理論的枠組みを定めている。まず、教師研究の流れを概観し、教師がなぜ特定の方法で教育を行うかを理解するためには、教師のアイデンティティに注目し、教師を全人的に捉えなければならないことを確認している。その後、言語教育分野の先行研究において教師のアイデンティティがどのように定義されているか、また教師のアイデンティティについてどのようなことが明らかにされてきたかをまとめている。最後に、教師のアイデンティティはストーリーによって構築されるため、アイデンティティを捉えるためには教師のストーリーを理解する必要があることを述べ、Connelly and Clandinin（1999）が提唱した「支えとするストーリー」という概念を援用して本研究の課題に取り組むことを述べている。

第3章「方法論」では、まず人間を理解することを目指すうえで、物語モード（ブルーナー，1998）に立つ必要性を説明している。次に、ライフヒストリー研究と、2種類のライフストーリー研究の特徴と相違点を整理し、本研究では、社会構成主義的立場のライフストーリー研究を行うことを述べている。社会構成主義的立場のライフストーリー研究を行う第一の理由として、複合的、流動的、個人的な支えとするストーリーの構築と変容の過程を理解するためには、個人の経験の違いを捨象してはいけないことを挙げている。第二の理由は、筆者は読者のストーリーの再生成を願っているため、複数のストーリーを許容する社会構成主義的な立場を取る必要があることである。さらに、研究者がライフストーリーの生成に深く関与することが孕む問題と、その問題を軽減しようとするリフレクシヴィティという戦略についても言及している。

第4章「調査の概要」では、本研究で行った調査の概要を示している。まず冒頭で、本研究のリサーチ・クエスチョンを設定している。リサーチ・クエスチョンは、（1）目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのようなものか、（2）目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのように構築され、変容していくのか、（3）目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのようなときに教育実践のなかに表現され、どのようなときに表現されないのか、の3つである。続いて、14名の補習校教師に対して予備調査を行い、最終的に3名の調査協力者について本研究で取り上げるに至った経緯と、協力依頼の手続きを説明している。その後、インタビューの実施方法、データ分析の方法、データの提示

方法を記している。

第5章「Aさん」、第6章「大村さん」、第7章「田中さん」では、それぞれの調査協力者と筆者の出会いとインタビューの経過の記述、調査協力者達が働く補習校の概要、調査協力者のストーリーと、それに対する考察を示している。Aさんは「ダイバースな中でのアイデンティティの確立をサポートする」という支えとするストーリー、大村さんは「子どものために教える」筋と「発想や思考を深め、それを日本語で発信する力を育てる」という筋を含む支えとするストーリー、田中さんは「子ども達の『したい』と思う気持ちを大切にする」という筋と「子ども達が自らについて決める」という筋を含む支えとするストーリーを構築し、自身が教える子ども達の実情に即した教育を行っていた。

第8章「3人のストーリーの考察」では、第5章から第7章に示した各調査協力者のストーリーを、支えとするストーリーの構築過程とその表現、協力者達にとっての支えとするストーリーを生きる意味に注目して比較し、それらの共通点と相違点について考察を行っている。そして、最後にリサーチ・クエスチョンに対する答えを示している。協力者達の補習校における支えとするストーリーは、自身の人生に一貫性を持たせるものであり、それぞれ異なっていた。しかし、彼女達の支えとするストーリーは、補習校で働きはじめるまでにそれぞれが生きてきたストーリーが内包していた、学ぶことや生きることの主役は本人であるというイメージを原点として構築されていたという点で共通していた。はじめは漠然としていた支えとするストーリーは、子どもを全人的な存在として捉え、補習校の子ども達の実情に対する理解を深めたこと、そして、補習校で日本国内を基準とした教育を行うことを批判的に考えたことによって、具体的になっていった。協力者達は、支えとするストーリーを表現するための方法を持っていたときに教育実践の中で表現することができた。また、日本国内の教育を基準とするという神聖なストーリーから自由であることも、支えとするストーリーを自由に表現することを可能にしていた。支えとするストーリーを補習校にいる他の人々と共有しているかどうかも、支えとするストーリーが表現できるか否かを左右していた。

最後に「おわりに」で、調査をする中で筆者が感じていたことや考えていたことを振りかえり、補習校をめぐる現在の筆者のストーリーを記して本研究を締めくくっている。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　瀬尾悠希子　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主査　大阪大学教授　青木直子 副査　大阪大学教授　マシュー・バーデルスキー 副査　大阪大学准教授　高木千恵

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：多様化する子ども達を教える補習授業校教師の支えとするストーリーの構築と変容

学位申請者　瀬尾悠希子

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　青木直子
副査　大阪大学教授　　マシュー・バーデルスキー
副査　大阪大学准教授　高木千恵

【論文内容の要旨】

本研究は、海外に在住する日本人の子どもを対象とした補習授業校（以下、補習校）の教師達がどのようにして多様化する子ども達の実情に即した教育ができるようになったかを明らかにしようとするものであり、「はじめに」と「おわりに」を含め 10 章、A4 判 210 ページからなっている。

「はじめに」では、本研究を行う動機と本研究のスタンスに影響を及ぼした、申請者の補習校をめぐる個人的経験を述べている。

第 1 章「研究の背景」では、グローバル化の進展に伴い喫緊の課題となっている、マルチリンガル、マルチカルチュラルな子ども達の教育において、継承語学校が重要な役割を担っていることを述べ、その意義と課題を挙げている。続いて、補習校では、帰国の準備のための教育から、マルチリンガル、マルチカルチュラルな子ども達に対応した教育への転換を迫られていることを説明している。そして、これまで補習校の教師に焦点を当てた調査研究が十分に行われてきていないことから、本研究の課題を、多様化する子ども達に対応した教育を行っている教師がどのようにして、多様化する子ども達に沿った教育を行おうという考えや、そのための授業実践に必要なスキルなどを身につけてきたのかを探ることとした。

第 2 章「理論的枠組み」では、本研究の課題に取り組むための理論的枠組みを提示している。まず、教師研究の流れを概観し、教師の教育実践を理解するためには、そのアイデンティティに注目し、教師を全人的に捉えなければならないことを確認している。その後、言語教育分野の先行研究において教師のアイデンティティがどのように定義されているか、また教師のアイデンティティについてどのようなことが明らかにされてきたかをまとめている。最後に、教師のアイデンティティはストーリーによって構築されるため、アイデンティティを捉えるためには教師のストーリーを理解する必要があることを述べ、Connelly and Clandinin（1999）が提唱した「支えとするストーリー」という概念を援用して本研究の課題に取り組むことを述べている。

第 3 章「方法論」では、まず人間を理解することを目指すうえで、物語モード（ブルーナー，1998）に立つ必要性を説明し、本研究では、社会構成主義的立場のライフストーリー研究を行うことを述べている。さらに、研究者がライフストーリーの生成に深く関与することが孕む問題と、その問題を軽減しようとするリフレクシヴィティという戦略についても言及している。

第 4 章「調査の概要」では、本研究で行った調査の概要を示している。まず冒頭で、本研究のリサーチ・クエスチョンを設定している。リサーチ・クエスチョンは、(1) 目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのようなものか、(2) 目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのように構築され、変容していくのか、(3) 目の前の子どもの実情に対応する補習校教師の支えとするストーリーはどのようなときに教育実践のなかに表現され、どのようなときに表現されないのか、の 3 つである。続いて、予備調査を経て、最終的に 3 名の調査協力者について本研究で取り上げるに至った経緯と、協力依頼の手続きを説明している。その後、インタビューの実施方法、データ分析の方法、データの提示方法を記している。

第 5 章「A さん」、第 6 章「大村さん」、第 7 章「田中さん」では、それぞれの調査協力者と筆者の出会いとインタビューの経過の記述、調査協力者達が働く補習校の概要、調査協力者のストーリーと、それに対する考察を示している。

第 8 章「3 人のストーリーの考察」では、第 5 章から第 7 章に示した各調査協力者のストーリーを、支えとするストーリーの構築過程とその表現、協力者達にとっての支えとするストーリーを生きる意味に注目して比較し、それらの共通点と相違点について考察を行い、最後にリサーチ・クエスチョンに対する答えを示している。協力者達の補習校における支えとするストーリーは、自身の人生に一貫性を持たせるものであり、それぞれ異なっていた。しかし、彼女達の支えとするストーリーは、補習校で働きはじめるまでにそれぞれが生きてきたストーリーが内包していた、学ぶことや生きることの主役は本人であるというイメージを原点として構築されていたという点で共通していた。はじめは漠然としていた支えとするストーリーは、子どもを全人的な存在として捉え、子ども達の実情に対する理解を深めたこと、そして、補習校で日本国内を基準とした教育を行うことを批判的に考えたことによって、具体的になっていった。協力者達は、支えとするストーリーを表現するための方法を持っていたときに教育実践の中で表現することができた。また、支えとするストーリーを補習校にいる他の人々と共有しているかどうかも、支えとするストーリーが表現できるか否かを左右していた。

最後に「おわりに」で、調査をする中で筆者が感じていたことや考えていたことを振りかえり、補習校をめぐる現在の筆者のストーリーを記して本研究を締めくくっている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、理論、データ、その解釈と考察が過不足なく丁寧に書き込まれており、論理的な議論が構築されている。先行研究は、社会の変化を背景にした継承語教育、補習校の現状、教師研究の歴史と教師のアイデンティティ研究の重要性、研究方法論としてのライフストーリーの妥当性が述べられており、申請者が幅広い正確な知識を持っていることが示されている。丁寧な聞き取りと、慎重な解釈によって描かれた協力者３名のライフストーリーは読者がそれぞれの教師を深く理解することを可能にし、それらの比較によってリサーチ・クエスチョンの答えを導き出していく議論は手堅く、説得力がある。

この論文はあえて、補習校が社会の変化に合わせて変わっていくためにはどうしたらいいか、子ども達の現実に合わせた教育実践のできる教師を育てるにはどうしたらいいかという議論は避けている。それは、補習校が置かれた難しい状況では、一朝一夕に問題が解決することはないという認識に基づいており、無責任な提言をしないという申請者の責任ある態度であると考えられる。

本論文には博士論文としての不足な点はほとんどない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。